

二〇二二年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は□一から□二、2ページから22ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

この章では、商品を供給する生産者が、どのように生産するか、生産量と値段をどう判断しているかを学びます。

まず、そもそもものを作るとは何でしょう。イチゴを例にとると、次の手順で進められます。まず、土地の上にイチゴを栽培するハウスを作ります。イチゴの苗を植えて、肥料を与え、病害虫を防ぐために農薬を使い、生育していく。途中では、日々、順調に生育しているかどうか、人手を使って確認します。収穫の時期を迎えると、一粒一粒でき具合を見て、収穫し、検査して、出荷のための包装をしていきます。

A

このように、ものを作るとは、最初は土地やパイプハウスなどの設備を用意し、栽培の段階では、苗、水、肥料などの原材料を、人手や機械を使って生育し、最終的に出荷できる商品に作り上げていくことです。

しかし、問題は何をするにもお金が掛かるといふ点にあります。土地がなければ、土地を買う、パイプハウスも作る。その設備が出来たら、今度は苗や肥料、農薬を買ってくる。栽培中の生育の管理とか収穫時など人手や機械の手を借りるところでは、お願ひした人たちへの賃金の支払い、機械が必要であれば、その購入費用や借りる費用も用意しなければなりません。水や電気代の支払いも必ずついてきます。これらの栽培、供給に掛かるお金を「費用」と呼んでいます。

もう一つの問題は、この費用をどう支払うかにあります。その支払いのためのお金をどう用意するか。①これまでに蓄えた貯蓄を崩すか、②その商品売った収入の中から支払うか、または③借金して払うなど、いろいろ考えられます。しかし、②の収入はまだ入っていない段階であり、③の借金も後々のXフタンになるので避けたい。とすれば、①の自分の貯蓄から支払うのがいいことになります。

B

それでは、この貯蓄とは何でしょうか。貯蓄は、それまで何年にもわたって栽培、出荷してきたことで得られた利益が積み重なったものです。例えば、昨年度500万円の利益が出れば、それを貯蓄として蓄えて、今年度の費用の支払いに使うということになります。

イチゴの栽培にせよ、商品を供給することは、これからもずっと続けていく計画のもとで、行っているのは間違いないです。とすれば、続けていくためには、どうしても利益を出さなければなりません。さらに農家であれば、くらしを支えるための費用も入ってきます。したがって、翌年のそれらの費用の支払いができるように収益を出す必要があります。

C

このことからわかるのは、費用を上回る収入がないと、利益が出ないということです。費用は栽培の始めから出荷までに掛かるものですから、あらかじめ、その費用総額はわかります。したがって、その明らかになっている費用総額を超えて必要な利益を出すためには、どれだけ収入が必要かはこの段階で明らかになっています。

仮に、イチゴの栽培費用が一パックあたり200円、必要なくらしの費用が同じく200円とすると、どれくらいの値段で売らなければならないでしょうか。

- ① 500円
- ② 600円
- ③ 800円

答えは③の800円です。計算式は次のとおりになります。

今年度の支払い費用しはら || 栽培費用さいばい 200円 + かなりの費用 200円

来年度に必要な費用 || 栽培費用さいばい 200円 + かなりの費用 200円

来年度の費用を利益で賄まかなうとすると、利益は「 あ 〇円必要になります。

来年度以降もイチゴを生産し続けるためには、今年度の収入で利益を出し、その利益で来年度の生産費用を賄まかなえるようにしなければなりません。したがって、今年度の利益は来年度の費用を超える金額にならなければなりません。

したがって、(今年度に必要な) 収入は、

利益 (〇 あ 〇円) + 費用 (〇 い 〇円) || 「 う 〇円

ここから、イチゴは一パック800円としなければならないことがわかります。これが目標とする販売金額はんばいになります。

この収入と費用、利益の関係をグラフで確認してみましよう。

ところで、このようなグラフは、これからよく出てくるので、読み方を説明しておきましょう。わかっている人は、とばしてもかまいません。

縦軸たてじくは「費用金額」となっていますが、これは、上に行けば行くほど、金額が大きくなることを示しています。一方、横軸よこじくは「収入金額」となっていますが、これは右に行けば行くほど収入金額が大きくなることを表しています。また、収入線のある点は、

その左側に延ばした線が縦軸たてじくにぶつかる場所にある「費用金額」と、下方に延ばした線が横軸よこじくにぶつかる場所にある「収入金額」の組み合わせになります。

このグラフでは、A点の費用は400円、収入が400円と等しくなっています。費用と収入が等しくなっていることがわかります。

ここでは仮に費用は収入金額とは関係なく、同じ金額だけ掛かる、つまり金額が固定されているとします（厳密に言えば、収入金額が増えるのに連れて増える費用もあります）。また収入金額は、供給量を増やすことで、右側に行けば行くほど収入額は増えていきます。

このグラフのポイントは、A点400円よりも左側では、固定された費用に対して収入金額がまだ小さいので、利益が出ない、損失が出ている状況じようきようであること、逆にA点より右側では、費用より収入が大きくなって、利益が出ている状況じようきようを表している、ということにあります。

さらに、翌年にかかる費用のことを考えて、それを賄まかなえる十分な利益を出すためには、B点800円以上の収入金額が必要になることがわかります。

こうして見ると、売れない、期待より売れないことが最も生産者にとって困ることであることがわかります。売れなければ、十分な収入が入らず、事前に掛かかった費用を払はらえなくなります。「 a ー」

しかも、イチゴであれば、最初の親株おやかぶ（最初の苗なえ）を植うえるのは、収穫しゆうかくの一年前です。Yテナントウいんとうに出るまで一年間掛かけて、最終的に売れるかどうかはまだわかりません。栽培さいばいしたイチゴの先行きはまだまだ不透明ふとうめいです。

D

第1章*2では、このように将来がどうなるかわからないことを「不確実性」、また将来、損をするかもしれない危険性を「リスク」

と呼びましたが、生産者は日々、その不確実性とリスクをどう克服こくふくしていくかという難しい仕事をしているのです。

ところが、生産者にとって、やっかいな不確実性とリスクを生み出しているのは、他ならぬ私たち消費者なのです。

私たちの何げない消費行動がどのような不確実性とリスクを生み出しているのでしょうか。そもそも、イチゴであれば、一年間栽培さいばいし、出荷して、テントウに並ぶのはちょうど完熟するころの二、三日前に過ぎません。そもそも「不確実な」将来に向けて生産をしているのです。そして、その短期間に売り切れるかどうかもわかりません。困ったことに、私たちはそのイチゴについて、買うか、買わないかまたはどちらとも決めないという三つの異なる態度を取っています。

第一の「買う」場合。問題ないように思われますが必ずしもそうとは言えません。全部を買わないで、結果として売れ残りが出る場合、十分な販売収入はんばいを得られない「リスク」があります。また売れたとしても、想定していた値段で売れない「リスク」もあります。

売れ残りが出る場合、それだけ無駄な生産をしたこと、また逆に売り切れて足りなくなった場合には、せっかくの収入を増やす機会をみすみす失ってしまうことにもなります。

第二の「買わない」場合。当然ながら、必要な収入を得られない大きな「リスク」につながります。その一年間に、消費者の好み、嗜好しこうが変わったり、経済環境けんぎきょうが変わり、不況ふきょうになったりすることで、売れなくなるリスクは常に存在しています。

第三の「買うか、買わないか、よくわからない」という曖昧な態度あいまいも、生産者には困りものです。例えば、出始めのまだ需要じゅようが小さいときには、市場に出していいかどうか、迷わせる「不確実」な話になります。しかし、生産者は、不確実な先行きでも生産を止めるわけにはいかないのです。

このように消費者に関わるリスク以外にも、他の生産者、他店との競争や、栽培途中さいばいとちゆうで台風とか自然災害に遭あうリスクもつきものです。生産者は、多種多様なリスクと不確実性に囲まれています。

それと言うのも、イチゴを売って収入が得られるのが生産を始めてから一年後という点にあります。その一年間に何が起こるか、

事前には把握しきれません。

特に問題なのは、イチゴの生産、栽培過程では、苗代、肥料代、電気・水道代、資材費、人件費等々、様々な費用が掛かっており、おまけにそれらは、既に支払い済みになっていることです。イチゴの販売価格の大体四割ぐらいが、その生産に掛かった費用、「原価」になると言われています。

それらの費用を先払いしているのは、もちろん、売れた後に入ってくる収入をあてにしているからです。したがって、見込み通りの収入を得るためにも、売る場合の値段は決定的に重要であることがわかります。次の式のとおり、販売数量が多くても、一パックあたりの値段が安ければ十分な販売収入は得られません。逆に一パックの値段が高くても、販売数量が少なければ、十分な販売収入を得られません。

一パックの値段×販売数量＝販売収入

単純に掛かった費用を支払い、十分な利益が出るように値段をつけなければいかというと、そうとも言えません。仮に、台風被害で大損害が出た場合など、予期しがたい生産できなくなるリスクも勘案して、損害が大きくなるようにも値段を決めておきます。通常は、費用に期待する利益を上乗せして、値段を決めます。

E

しかし、そうやって、生産者が「勝手に」つけた値段で売れることはZホシヨウされていません。それこそ無数、多数のイチゴ生産者がイチゴを作っている中で、一件のイチゴ農家がつけた値段が他のイチゴよりも高すぎると当然ながら売れなくなり、個々の生産者は、スーパーとかに出回っている多くのイチゴがどれぐらいの値段で売られているか、一般に売られている値段を「相場」といい、その相場を前提に値段をつけなければなりません。

〔注〕 *1 パイプハウスⅡパイプを骨組みとしたビニールハウスのこと。

*2 第1章Ⅱ問題文は第3章である。

*3 勘案Ⅱあれこれ考え合わせること。

問一

A

E

 のうち、次の一文を入れるべき箇所として最も適当なものを一つ選び、A～Eの記号で答えなさい。

ところで、利益とは、売上げた収入から費用を差し引いたものです。

問二 本文で言う「費用」の具体例として不適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア イチゴを作る生産者が日々過ごし、生活するための費用。

イ イチゴを作るための防水設備や棚など、資材を揃えるお金。

ウ イチゴの生産に必要な情報収集のための通信費。

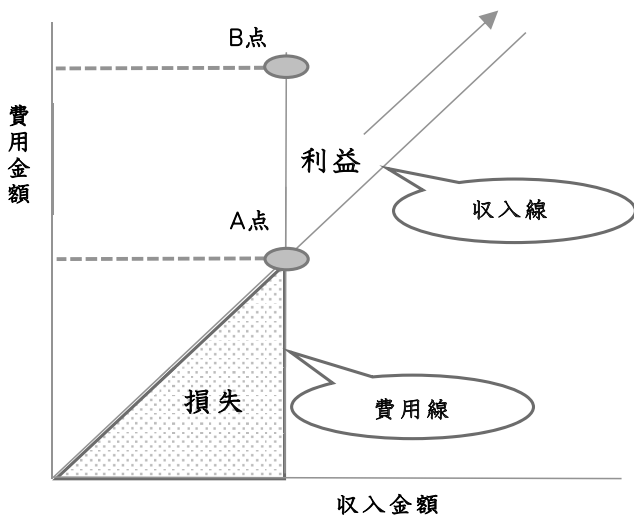
エ イチゴ栽培を趣味とする人たちが集まる団体への寄付金。

オ 市場にイチゴを運ぶために必要な車とガソリン代。

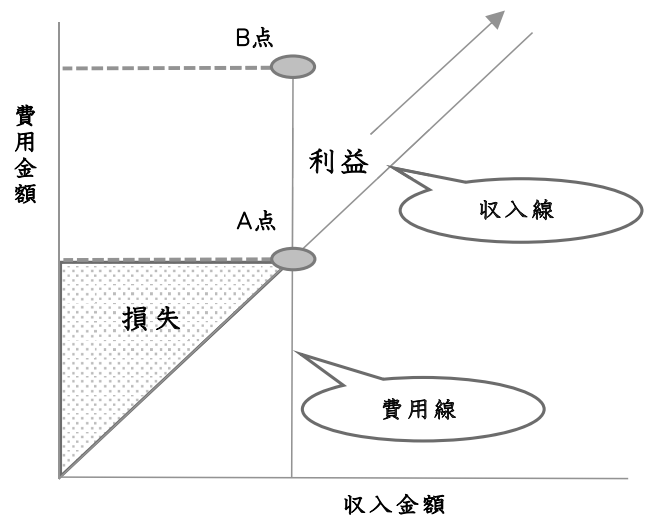
問三 空らん「あ ー ー」に入る数字として最も適当なものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を何度用いてもかまいません。)

ア 200 イ 400 ウ 500 エ 600 オ 700 カ 800

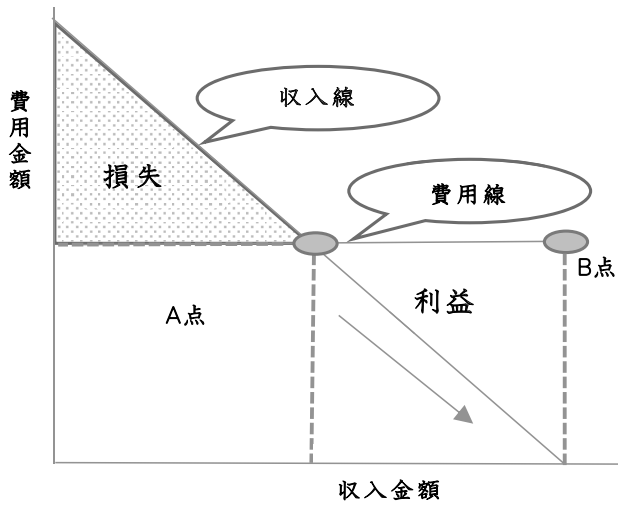
問四 波線「この収入と費用、利益の関係をグラフで確認してみましよう」とありますが、収入と費用、利益の関係を示したグラフとして最も適当なものを次の図ア～オの中から一つ選び、図の記号で答えなさい。



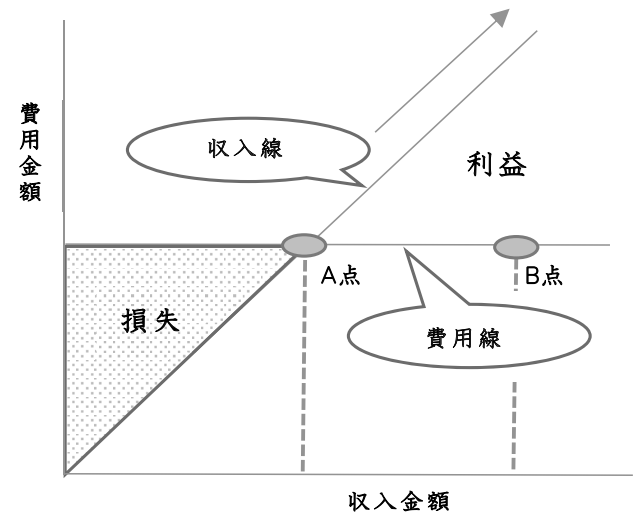
【図エ】 収入と費用、利益の関係



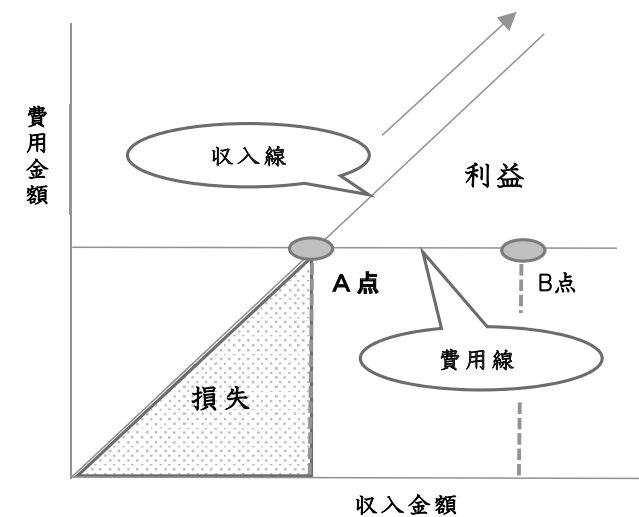
【図ア】 収入と費用、利益の関係



【図オ】 収入と費用、利益の関係



【図イ】 収入と費用、利益の関係



【図ウ】 収入と費用、利益の関係

問五 本文後半では「不確実性」と「リスク」についての論点が出されていますが、それによってどのような効果がありますか。

その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 消費者がどれくらい費用を原価に上積みしているのかを、生産者の事情を出しつつ効果的に示している。

イ 生産者がより良い商品を作るために考えるべき点を、客観的に示すのに一役買っている。

ウ 生産者が損をしないよう、改善すべき点を挙げて値段をつける必要性に説得力をもたせている。

エ 生産者に的を絞っていた議論から消費者についても読者に注目させるはたらきがある。

オ 売る前の議論から売った後の議論に自然と筆を進め、値段について読者がより深く考えられるようにしている。

問六 空らん「 a 」に入る文として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 利益どころか大きな損失を被ることになるわけです。

イ 期待通りの結果にならないければ、リスクに耐えられなくなるわけです。

ウ 消費者の求めに応じなければ、そもそも売ることができないわけです。

エ 貯蓄して次の生産に備えるためには、生産性を高める必要があるわけです。

オ 費用だけがかさみ、不確実性が高まってしまうわけです。

問七 本文の内容に合っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 貯蓄を切り崩し費用を支払うしか生産者に取り得る方法はない。

イ ある程度の損失は、全体の利益のためには避けられない。

ウ 価格には先々の生産にかかる費用は含まれていない。

エ 最も悩ましいのは、何をするにも費用がかかることである。

オ 消費者が生産者の不確実性を高めてしまうところがある。

問八 二重線「商品を供給するくどう判断しているか」とありますが、「商品を提供する生産者」はどのようなことを考え「値段」を判断していますか。四十五字以内で答えなさい。

問九 一線 X「フタン」・Y「テントウ」・Z「ホシヨウ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいねいにはつきりと書くこと。)

〔二〕 次の文章は、あさのあつこの小説『ハリネズミは月を見上げる』の一節である。御蔵さんと菊池さんは同じ高校に通う同学年

の生徒である。これを読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

菊池さんは待ってくれなかった。

とんとんとリズムよく階段を降りていく。

菊池さんを見ていると、揺らぐ。独りでもいいんだと、ふっと思ってしまう。独りになることを怖がらなくていいんじゃないかと、考えてしまう。

怖がらなくていい？ ほんとに？

わたしは怖かった。今でも、怖い。

集団の場で独りになることを恐れている。一緒にお昼を食べる友だちがいない。おしゃべりをする相手がない。ラインの仲間に入れない。クラスメイトから距離を置かれ、「あの子は独りだ」と烙印を押される。

① 怖い。やっぱり怖い。

学校という場は限りなく単一に近い。異物を嫌う。突出したものを、独特のものを、規格外のものを厭う。わたしは誰にも嫌われたくないし、厭われたくない。

独りになりたくない。

菊池さんは平気なんだろうか。独りでいることにも、他人に嫌われることにも耐えられるだろうか。

制服の背中を目で追いながら、考える。

わからない。

菊池きくいけさんは謎なぞだ。菊池きくいけさんの背筋は「あ」と伸びて、背中のフォーム*1は強くてきれいだ。でも、内側うちがわはどうなのか。恐れや怯おびえを抱かかえ込んで震ふるえたりしていないのか。

菊池きくいけさんには「？」がたくさんたくさん付きまとう。

ピーツ。

甲かんだか高い鳥かの聲こゑが響ひびいた。

菊池きくいけさんが階段かたてを降り切きったところで、顔を上げた。辺りに視線しせんを巡めぐらせる。指導室*2にいたときより心持こころもち、幼こく見えた。

「ヒヨドリだよ」

わたしは言った。

菊池きくいけさんが振り向むき、首かしを傾かしげる。この仕草しぐさも幼こい。

「今の、ヒヨドリの声」

「ヒヨドリ？ ああ、さつき名郷*3先生も言いってたね」

「うん。灰色こがしっぽい、これくらい」

わたしは両手りょうてを二十センチほど開ひらいてみせた。

「大きさ。鳴き声ななきこゑがうるさいの。中庭なかつまにピラカンサの木きがあるでしょ。その枝えだによく止とまってる」

「ピラカンサって、秋あきにきれいな実みを付けるやつ？」

「そう、それ。冬ふゆまで実みがなってるから、ヒヨドリのやつが餌えさにしてるの。取り合とりあいの喧嘩けんかなんかもしよっちゅうやってる」
菊池きくいけさんが僅わずかに②目めを細こまめた。知らなかつたつがやと呟つぶやく。

「うん、誰だれも知らないと思う。中庭なかつまの鳥とりなんかに興味きょうみもたないもんね。でもね、すごかつたの」

「すごい？」

「すごい。一度だけなんだけど鷹が来たことがあったんだ。小鳥を狙って現れたらしいんだけど、そのオーラがすごくて、ヒョドリなんか完全にびびっちゃってた」

菊池さんが③笑った。

声は立てない。唇がすつと横に広がって、歯がのぞいた。口元も眼もちゃんと笑っている。本物の笑みだ。とても美しかった。

「④やっぱりだね、御蔵さん」

「え？ やっぱりって？」

「鳥、好きなんだ」

わたしは顎を引いた。手すりに軽く手を置いて、菊池さんを見下ろす。今はわたしが踊り場に立っている。⑤背中が温かい。窓からの光を受けているからだ。さつきとは逆に、わたしが明かりを背負い、黒い影になっているはずだ。

鳥は好きだ。

鶏でも鴉でもヒヨドリでも、燕も雁も雀も好きだ。羽のある生き物は見ていて飽きない。祖母は自分の家の庭木に、半分切ったリンゴやミカンを突き刺していた。いろんな鳥がやってきて、さかんにつつき、リンゴもミカンも皮だけを薄く残してきれいにたいらげていた。

「ほら、今、飛んできた緑の鳥はメジロ、頭と喉が黒いのはシジュウカラ、あっちの大きな灰色の鳥がヒヨだよ。おや、根本にいろのはツグミだね」

祖母が教えてくれた。

枝から枝に軽やかに飛び回るメジロが愛らしくて、シジュウカラのピツピツと鳴き交わす声がかわいくて、小鳥たちを追い払ってリンゴやミカンを独り占めするヒヨドリが腹立たしくて、でも、憎めなくて、わたしはいつまでも鳥たちを眺めていた。

「うん、好き。昔、お祖母ちゃんの家でね……」

わたしは階段を降りて菊池さんと並んだ。そして、同じ歩調で歩き出した。間をもたすためではなく、話したくて、聞いてもらいたくて、わたしはしゃべった。自分さえも忘れていた鳥たちとの記憶を思い出すままに、「い」としゃべった。

この人は鳥になんか興味を持つだろうかとか、こんな話をしてA白けないだろうとか、あたしのこと変人だと決めつけないだろうとか、いつもは頭の中で「う」音を立てる危惧を、ほとんど感じないまま話し続けた。話しながら校舎を出た。

菊池さんは相槌を打つことも首を傾げることもしなかった。でも、歩く速度はゆっくりになる。

聞いてくれているんだ。

確信できた。

グラウンドの端をなぞるように歩きながら、わたしはおしゃべりを続けた。

「じつと見ると、鳥ってすごく個性的なんだってわかるの。気が強くて挑戦的というか、生意気で意地悪なやつもいるし、臆病で用心深いのもいるの。要領のいいやつも、のんびりしたのもいる。餌を置いてやると、気の強いのが真っ先に飛んできてばくばく食べちゃうのね。その後、臆病なのが様子見ながら地面に落ちたりリンゴのクズなんかを、すつごくびくつきながらつついてるの。けど強いのが気が付くと、ぴいぴい怒っちゃって、弱いのを追い払うんだ。で、その隙に要領のいいのが横から残りのリンゴを持って行っちゃったりするの」

⑥あはっ。

不意に、菊池さんが噴き出した。

少し前屈みになって、口元にこぶしを当て、くすくすと笑う。

「いるよね。人間にも、そういう、Bちやつかりしたやつ……」

笑いに言葉を途切らせながら、言う。

「あ、そうかな」

「ちやっかりしたやつ」を思い起こそうとしたけれど、誰の顔も浮かばなかった。

⑦あはははは。

菊池さんの笑い声が震えながら響く。

こんな風に笑う人なんだ。

初めて耳にした菊池さんの笑い声は、思いの外、⑧柔らかくてかわいらしかった。

「おもしろいね、御蔵さんは」

「えっ！」

「何？　なんでそんなに驚くの」

「あだし、おもしろいって言われたこと、今まで一度もなかった気がして……。ううん、間違いなく一度もなかった。一度もなかった。初めてだ。」

おとなしいねとか、静かだねとはよく言われてきた。でも、「おもしろい」は、なかった。わたし自身もわたしを知っている他人も、わたしをおもしろいなんて思わない。

「おもしろいよ」

菊池さんは前を向いたまま、口を軽く開けた。風を吸い込もうとしているみたいだ。

「御蔵さんはおもしろいよ。それに鳥が好きだ。だから、『森の王国』みたいな物語が書ける。でしょ」

足が止まった。

菊池さんも立ち止まる。でも、それはほんの二、三秒に過ぎなかった。瞬きをして、前を向き、菊池さんはすぐにまた歩き出した。

「あ、あの……、待って、あの」

心持、足取りを速めた菊池さんから、半歩遅れて歩いた。風が真正面から吹き付けてくる。強くはないけれど、埃っぽい。でも、清々とした葉っぱの匂いがした。

「あの、菊池さん」

「おもしろかったよ」

歩きながら、菊池さんが言った。わたしの方は見ていない。前だけを見ている。

「ストーリーはファンタジーなのに、鳥たちの生態がすぐリアルで、ヒヨドリの子が酔っぱらって暴れるところとか、卵を奪われそうになった小鳥たちが力を合わせて追い払うところなんて、迫力があって、読んでてどきどきした。何より、鷹の王がかっこよくて、凛々しくて、でもドジなところもあって個性的ですごいなって感じたの」

「あ、はい」

⑨ 我ながら間抜けな返事をしてしまった。でも、恥ずかしいとは少しも感じない。驚きの方が何倍も勝っていた。

（『ハリネズミは月を見上げる』 あさの あつこ）

「注」 *1 フォルムⅡ形。

*2 指導室にいたときⅡ「私」と菊池さんは、指導室で今朝遅刻した理由を先生に話し終わって、帰宅しようとしている。

*3 名郷先生Ⅱ菊池さんの担任の先生。

*4 オーラⅡある人や物が発する、一種独特な雰囲気。

*5 さつきⅡ指導室に向かう階段の踊り場で居合わせたときのこと。

『森の王国』Ⅱ「私」が国語の課題で書いた物語。小冊子に載せる作品の一つとして選ばれて、学年全体に配られていた。

問一 二重線 A 「白けない」 B 「ちやつかりした」とありますが、「白ける」「ちやつかり」のここでの意味として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「白ける」

ア 間がのびる

イ 冷たく接する

ウ 気まぜくなる

エ 場を盛り上げる

オ 気がぬける

B 「ちやつかり」

ア 抜け目ないさま

イ おどけたさま

ウ 冷静なさま

エ 落ち着かないさま

オ 物怖じしないさま

問二 空らん「あ」「う」に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あⅡしやん いⅡぼつぼつ うⅡぷちぷち

イ あⅡしやん いⅡさらさら うⅡぷちぷち

ウ あⅡしやん いⅡぼつぼつ うⅡそわそわ

エ あⅡゆらり いⅡさらさら うⅡそわそわ

オ あⅡゆらり いⅡぼつぼつ うⅡそわそわ

問三 ―線①「怖い。やっぱり怖い。」とありますが、御蔵さんは何を「怖い」と感じているのですか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア クラスの輪から離れて一人で過ごさざるを得ない状況になると、学校という集団生活を学ぶ場で、昼食を一緒にとつたり、楽しく会話したりすることができなくなるということ。

イ 出る杭は打たれるというように、突出して優れていることによってねたみや反感を買うことになり、クラスメイトから嫌われたり、仲間外れにされたりするということ。

ウ 均質な集団になりがちな学校という場において、みんなと違う行動をすることによって、周囲から変わっていると思われるで、嫌われたり孤立したりしてしまうこと。

エ 学校生活の中で、友達を積極的に作らないでいると、クラスメイトから一人でいることを好む者として見られてしまい、仲間にいれてもらえないということ。

オ 限りなく単一に近い学校という場では、周囲に合わせなかったり、変わった性質を持っていたりすると、それが原因となつてみんなから協調性がないと思われてしまうということ。

問四 以下は本文を読んだ六人の生徒の発言です。文章の内容を踏まえたものとして適当なものを次のア～カの中から二つ選び、

記号で答えなさい。ただし、解答の順番は問いません。

ア 生徒A |線②の「目を細めた」は、御蔵さんが持っている鳥への知識量に対して、菊池さんが驚く様子を表しているね。

御蔵さんみたいな友達が近くにいたら、学校生活も楽しくなりそう。

イ 生徒B |線③の「笑った」は、鳥が必死に自分の子を守っているときの様子をおもしろおかしく感じて笑っているわけだけど、ここはちよつとくすつと笑ってしまう場面なのかな。

ウ 生徒C 「笑い」を通して親密な関係になっていくことがうかがえるな。|線⑤「背中が温かい」のは窓から光を受けたからだけでなく、御蔵さんの心が解きほぐされていくことも表していると思う。

エ 生徒D |線⑥の「あはっ」は、エサを取り合う鳥たちの多様なふるまいを見て、菊池さんが思わずこらえられなくなつた笑いだね。生き物たちが時として意外なふるまいをすることってある気がする。

オ 生徒E 御蔵さんは、人が見過ごしがちな鳥の生態に興味を持ってよく観察しているね。菊池さんが御蔵さんのこの独特なありようを好意的にとらえておもしろがったのが、|線⑦の「あはははは」だと思う。

カ 生徒F 御蔵さんは、初めて目にした菊池さんの笑う姿を|線⑧「柔らかくてかわいらしかった」と評しているけれど、ここで菊池さんへの憧れが恋心に切り替わったことが見て取れると思う。

問五 一線④「やっぱりだね」とありますが、菊池さんはなぜここでこのように述べているのですか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 御蔵さんの書いた『森の王国』をすでに読んでいたから。

イ 人よりも鳥に興味のある御蔵さんの様子がかがえたから。

ウ 御蔵さんが中庭で餌を取り合う鳥たちをじっとみていたから。

エ 好きなことを語る御蔵さんは生き生きとっていて楽しそうだから。

オ 御蔵さんが自身の祖母から聞いた話をわざわざしてくれたから。

問六 本文では、歩く描写が多く見られます。それぞれの描写の効果の説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先を歩く菊池さんを「わたし」が追いかける冒頭の描写では、他者の視線を気にせず、大人びたように見える菊池さんの背中を追いかける「わたし」の菊池さんへの感情の高まりが表現されている。

イ 「わたし」が菊池さんに追いついて、横に並んで歩きながら、鳥について語る描写では、二人の心的距離が近づき、実際の位置関係と心的な距離感を関連づけるような表現がなされている。

ウ 菊池さんがグラウンドを歩く際、「わたし」との歩調がそろい、同じような行動をする部分は、「わたし」が菊池さんの話にすっかり耳を傾けようとしていることが効果的に伝わるように表現されている。

エ 菊池さんが「わたし」に「おもしろいよ」と言った後、二人が足を止める場面では、歩くことをやめて会話に集中しようとしていることや思いを打ち明けるときの緊張感や物語としての高まりを表現している。

オ 終末部で、再び足取りを速めて「わたし」の前を歩く菊池さんの描写には、菊池さんが「わたし」をほめることの照れくささや、顔を見られることの恥ずかしさから話を変えようとする様子が表現されている。

問七 ー線⑨「我ながら間拔けな返事をしてしまった」とありますが、この時の御蔵さんについての説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不器用ながらも菊池さんが自分への思いを伝えてくれ、より彼女と親密になれたことに驚いている。

イ 自分の才能に気が付かなかつたことに半ば呆れつつ、菊池さんが自分をよく見てくれていて、驚いている。

ウ ストーリー展開や描写の妙を生き生きと伝える菊池さんの姿に、自分と相容れないものを感じ、驚いている。

エ まさか自分が書いた物語を菊池さんが読んでくれ、そのうえ評価もしてくれているとは思わず、驚いている。

オ 菊池さんとのやりとりを通して、自分の感じていた怖さが薄らいでいることに気づき驚いている。

問八 御蔵さんの目には菊池さんはどのように映っていますか。御蔵さんから見た菊池さんの人物像に触れながら、六〇字以内で説明しなさい。

